

科目名	西洋文化史	科目責任者	西田 哲史
課題と試験担当教員	西田 哲史		
履修方法	T テキスト学習		
ナンバリング	CTETC420		

■ 科目概要

この授業では、21世紀という現代に生きる私たちが、西洋史上の各時代から学び取るべき社会的・文化的事象を中心に学習していきます。具体的には、西洋文明の源流といわれる古代ギリシア・ローマの時代から、ベルリンの壁崩壊に象徴される冷戦の終焉、ヨーロッパ連合の創設・拡大という21世紀初頭までを含めた大変長期にわたる時代を扱います。それは、たとえ時代が変わり、ところが変わっても、古代は古代なりに、中世は中世なりに、歴史は私たちにたえず、どう生きるべきかのヒントを与えてくれるからであります。各時代に人々が何を考え、行動していたかということを学びながら、自分とは異なる人々の経験に思いを馳せ、歴史を学ぶうえで大切な「他者」に対する「想像力」を鍛えていきたい。

■ 到達目標

西洋の歴史を学ぶとは、自分の「知らない」世界や人々の歴史、つまり「他者」の経験を学ぶことにほかならなりません。そこで大事なのは、「知らない」をそのままにしないことです。「自分には経験がないからわからない」という前に、「想像力」を働かせてみることです。そうした積極的な態度こそが、「興味がない」とか「無関心」だとか、しらけた気持ちを払拭します。歴史学において「想像力」を鍛えることがいかに大切か。この点を学んで欲しいと同時に、高校世界史を踏まえたスタンダードな教養と知識の習得を目指します。

■ 科目の計画・内容

学習範囲 該当する章など	学習内容
目次／まえがき	この授業で学習する項目について概観します。まずはよく目次を眺めてください。各章でどんな時代のどんな事柄について学んでいくかのおおよそのイメージがつかめると思います。まずは、興味のある章のページを読んでみるといいかもしれません。また、参考書は必ず用意して併読するようにしてください。
第1章 第1節	西洋の歴史や文化の特色が生み出されたとされる、古代ギリシアとローマの時代について学習します。この回では、約400年間の「暗黒時代」を経て、紀元前800年ごろに形成されたギリシア・ポリス（都市国家）の歴史について概観していきます。
第1章 第2節～第3節	前回に引き続き、この回では、古代ギリシアの歴史を代表的ポリスである、アテネとスパルタの両都市の事例を通じてみていきます。またギリシアのポリスと同様に都市国家として出発した（共和制）ローマについて概観します。
第1章 第4節～第5節	グラックス兄弟の改革が挫折して以後、ローマ社会は「内乱の1世紀」と呼ばれる、混乱の時代に入りますが、オクタヴィアヌスにより混乱に終止符が打たれると、帝政ローマの時代が始まります。この回では、ローマ帝国の盛衰と帝国におけるキリスト教の発展について学習します。
第2章 第1節	古代地中海世界は、ゲルマン人の大移動（375年）のなかで大きく動揺し、西ローマ帝国の滅亡（476年）をもって崩壊しました。それから数世紀の間に、ヨーロッパの東西に独自の性格をもつ文明世界が誕生しました。この回では、とくに西ヨーロッパにおける中世世界と中世封建社会の形成過程を学習します。
第2章 第2節	中世の西ヨーロッパはほぼ自給自足の自然経済が支配する農業社会であり、これは荘園制に支えられていました。また、封建社会の成立過程を通じて、修道士たちによる民衆教化が進み、ローマ・カトリック教会もその精神的権威を高めていきました。この回では、こうした当時の様子を学習します。
第2章 第3節	西ヨーロッパでは封建社会の成熟とともに、生産力が向上し、都市と商業の発達が見られると同時に、ローマ・カトリックの権威の高まりを背景に、イスラム勢力に対する十字軍運動が活発化しました。この回では、この十字軍について学習します。
第3章 第1節～第2節	10～11世紀ごろから封建社会は安定し、ヨーロッパ全体が秩序よく整った平和な社会になり、12～13世紀には盛期中世といわれる封建王政の時代を迎えます。この回では、この盛期中世以後の封建危機の時代について、変化を遂げる農村と発展していく都市経済について学習します。

学習範囲 該当する章など	学習内容
第3章 第3節～第4節	中世後期になると、教会や諸侯は力を失い、都市大商人と提携した国王が力を伸ばしました。こうして、中世封建社会は終わりを告げ、中央集権国家が競い合う時代を迎えます。この回では、封建危機の時代といわれる中世後期ヨーロッパにおける教会勢力の衰微と各国の中央集権化について概観します。
第4章 第1節	15～16世紀のヨーロッパは、中世カトリックの伝統的世界観が大きく揺らぎ、その後の世界史に大きな影響をもつ「ルネサンス・新航路の発見・宗教改革」という3つの潮流がヨーロッパ史を彩った時代です。この回では、まずイタリアからヨーロッパに広がった文化運動であるルネサンスについて学習します。
第4章 第2節	15世紀末からヨーロッパ世界の外へ向かっての積極的な膨張が始まります。この回では、ヨーロッパ人が海を通じて外の世界に進出していき、新航路開拓＝「地理上の発見」をなした大航海時代について学んでいきます。
第4章 第3節	宗教改革はルネサンスとならびヨーロッパの近代精神の根源を形作った運動でありました。今回は、16世紀のドイツを舞台に行われたルターの宗教改革、スイスのカルヴァンの改革、さらにイギリスにおける宗教改革について学習します。
第5章 第1節～第2節	17世紀前半は、ヨーロッパの全般的（あるいは一般的）危機の時代といわれます。この回では、ピューリタン革命、名誉革命とつづくイギリスの内乱と混乱について、さらにスペインからの独立後、海軍力強化を背景に経済的繁栄を謳歌したオランダについて学習します。
第5章 第3節～第4節	前回につづき、この回では、まず17世紀前半が「ヨーロッパ全般的危機の時代」と呼ばれる所以でもある、ドイツを主戦場として展開され、しかも国際的にも大きな影響を与えることになる三十年戦争と、その戦争被害がドイツに次いで大きかったスペインのカタルーニャ（カタルニア）での反乱について学びます。
第5章 第5節～第6節	前回につづき、この回でも、まず「危機の時代」を象徴する、フランスでのフロンドの乱（貴族の反乱）について概観します。つづけて、17世紀後半フランスで出現したルイ14世下の絶対王政の時代について学習します。因みにルイ14世の時代は、文化の面では、歴史上最も華やかな時代のひとつでありました。
第6章 第1節～第2節	絶対王政が盛んになった17世紀後半以降、これを背景にしてバロック・ロココなど華やかな宮廷文化・貴族文化が形成され、学問でも近代ヨーロッパの思想・科学の基礎が確立しました。この回では、まず、台頭してきたロシアと躍進著しいプロイセンの絶対王政について概観します。
第6章 第3節～第4節	前回に続き、この回では、まずオーストリア（ハプスブルク家）の絶対王政について概観し、次いで、絶対王政のもとでバロック・ロココなど華やかな宮廷文化が形成され、学問でも近代ヨーロッパの思想・科学の基礎（啓蒙思想）が確立していくことを学びます。
第6章 第5節	18世紀のイギリス文化を象徴するものとして、市民の文化的社交場としてのコーヒーハウスの出現がありますが、これは世論形成の重要な場となりました。またこの時期は、イギリスがフランスと植民地の支配権と世界商業の覇権を巡って争った時代でもありました。ここでは、こうした状況について概観します。
第7章 第1節	今回から3回に分けて、欧米社会における近代社会の発展・成長という側面を学習していきます。この回では、まず「市民革命」という概念でとらえられることの多いアメリカ革命あるいはアメリカ独立革命とよばれるアメリカの独立についてとりあげます。
第7章 第2節	前回に続き、今回も「市民革命」という概念でまとめられることがあるフランス革命とナポレオンの時代をとりあげます。このフランス革命は、アメリカ革命や19世紀の他の革命と比較しても、より広範で徹底した社会変動であった点にも注意しながら学習してください。
第7章 第3節	この回では、「市民革命」と同時期にイギリスで展開していた「産業革命」と呼ばれる工業化過程について学習します。イギリスの産業革命は、農業中心の社会から工業化社会への転換の出発点でありました。この現象はイギリスからヨーロッパ諸国、アメリカにも広がっていくこととなります。
第8章 第1節	19世紀のヨーロッパは、フランス革命と産業革命により生み出された自由主義や資本主義経済が大きく進展すると同時に、近代諸科学を発展させ、世界をリードし支配するなど、世界史におけるヨーロッパの全盛時代を築きました。この回では、まず各国の自由主義や国民主義運動について学習します。
第8章 第2節～第3節	19世紀は「科学の世紀」といわれますが、この回では、とくに目覚ましい進歩を遂げた自然科学部門の発見・発見について概観します。また、この19世紀はイギリスを筆頭に各国が世界各地を植民地化するなど海外進出が活発な時期でありました。こうしたヨーロッパ諸国の世界支配についてもみていきます。
第9章 第1節～第2節	第1次世界大戦は帝国主義諸国間の対立だといわれています。帝国主義とは、19世紀末以降の欧米列強による世界分割・植民地政策のことです。この回では、まず19世紀後半から第1次大戦へいたる過程を、ヨーロッパにおける列強の対立、さらにバルカン半島をめぐる諸問題の考察を通して学習します。
第9章 第3節～第4節	前回に続き、この回では、第1次世界大戦（1914～1918年）の経過とその歴史的意義についてみていきます。さらに戦争末期の1917年にロシアでは、食糧危機に起因する革命（ロシア革命）により、ロマノフ朝は崩壊し、史上初の社会主義政権の誕生をみます。こうした一連の出来事についても学習します。
第10章 第1節～第2節	第1次世界大戦終結から20年、ヒトラー率いるナチスドイツのポーランド侵攻を端緒に世界は再び戦争へと突入していきました。この回では、第2次世界大戦の原因を含め、その前半戦について学習します。

学習範囲 該当する章など	学習内容
第10章 第3節～第4節	1941年6月ドイツ軍が独ソ不可侵条約を無視して、ソ連を奇襲し、独ソ戦が始まり、同年12月には日本軍がハワイの真珠湾にある米軍基地を奇襲し、太平洋戦争が勃発します。こうしてヨーロッパとアジアの戦争が連動した世界大戦となります。この回では、第2次世界大戦の後半戦について学習します。
第11章 第1節～第2節	2つの世界大戦を経て、ヨーロッパはそれまでの世界の中核的な地位を失い、単なる世界の一地域となりました。この回では、戦後のヨーロッパと世界の関わりについて、「冷戦」、「ヨーロッパ統合」、「デタント（緊張緩和）」などをキーワードに概観していきます。
第11章 第3節～第4節	1989年11月のベルリンの壁崩壊、1991年のソ連邦の解体により、戦後長く続いた冷戦に終止符が打たれることになりました。ヨーロッパでは、1993年にヨーロッパ連合（EU）が発足し、大戦後始まったヨーロッパ統合はさらに深化していきました。この回では、冷戦後の世界について簡単に概観します。

■ 学習方法・評価

種別	評価基準
試験	試験は与えられたテーマに関する論述になりますが、学習内容をきちんと理解し、歴史用語が正しく使えているかなど、高校世界史を踏まえた基礎的な理解を問います。
レポート	レポートの作成にあたっては、そのレポート課題が何を要求しているかをよく考えて作成してください。その際、教科書の記述だけでは不十分ですので、各自が調べ、必ず参考文献（こちらが指定する参考文献以外でも構いません）を読んだうえで、論述してください。参照・引用文献についてはレポートの最後に、著者・『書名』・出版社・出版年を必ず明記してください。

■ 評価方法

- 科目試験：70%
- レポート：30%

■ 教科書

書名：外国史（西洋史）
著者名：浅田實
出版社名：創大通信教育部
出版年：
版：
刷：
ISBN：

■ 参考書

- ・著者名：服部良久／南川高志／山辺規子編著
- ・書名：大学で学ぶ西洋史[古代・中世]
- ・出版社：ミネルヴァ書房
- ・出版年および版：2006年・初版

- ・著者名：小山哲／上垣豊／山田史郎杉本淑彦編著
- ・書名：大学で学ぶ西洋史[近現代]
- ・出版社：ミネルヴァ書房
- ・出版年および版：2011年・初版

■ 履修上のアドバイス

学習に際しては、教科書の記述だけでは不十分ですので、学習内容を補足するうえでも、必ず参考書（上にあげた以外の参考書でも構いません）を用意して、毎回の学習部分に該当する章や節を読むなどして、知識の習得に励んでください。

■ 自習時間

レポート1課題につき、参考文献の熟読、要旨をまとめ、論述するという作業を含めると、16～20時間ほど必要です。
科目試験は出題範囲が広範囲になりますので、試験準備のためには、参考書の熟読などを含め、最低40時間の学習が必要です。

■ 担当者のプロフィール

[出身大学] 創価大学（学士・修士） / （ドイツ）ビーレフェルト大学（Dr.phil: 歴史学博士） [所属] 創価大学経済学部 [専門分野] 現代ドイツ社会経済史 [担当科目] 西洋経済史、現代経済史、歴史I（現代史）、地域研究II（ドイツ研究）等 [主著] Satoshi Nishida, *Der Wiederaufbau der japanischen Wirtschaft nach dem Zweiten Weltkrieg: Die amerikanische Japanpolitik und die ökonomischen Nachkriegsreformen 1942-1952*, Stuttgart 2007.